文部科学大臣賞

『思いのこもった給食』

埼玉県新座市立野火止小学校　六年　茂木　成果

「美味しすぎる・・・」

黄金色でカラッとしたごぼうと、油であげられ、たれがからんだ鶏肉。あっという間に甘辛さとゴマの風味が口に広がった。心の中は、美味しいという感情と感動があふれた。なぜなら、そのメニューは私にとって特別だったから。

私は給食が大好きだ。一年生のころは、人並みの量を食べるのに精一杯だった。だが、成長するにつれ、たくさん食べられるようになった。喜んだことを覚えている。また、給食をきっかけに料理や食に興味を持つようにもなった。すごくおいしかったものを両親や姉妹にも食べてほしいという思いがあったからだ。料理は手間と時間がつきものだ。その上、全体の栄養バランスにも目を向けなければならない。一年間、子どもたちに愛されるメニューを考えて作る栄養士さんや調理員さんを、心から尊敬する。

そんなことを考えていたある日、家庭科の授業で「テーマを決めて給食の献立を作る」というものがあった。料理が好きな私にとっては願ってもないことだった。特に、旬や値段、色合い、栄養バランスに着目してメニューを作った。しばらくたったある日の昼休み、栄養士さんに呼ばれた。どうやら、私の立てた献立を使いたい、ということだった。楽しく真剣に取り組んだものだったので、そのことが認められた気がした。心から食べてみたいと思ったものが、調理員さんに作ってもらえると決まった。それが何よりも喜ばしかった。

とうとう、私の考えた献立がでた。想像していたものを上回る味で、とても驚いた。また、クラスメイトが美味しいと言ってくれたことに安心した。もし、生徒の口に合わなかったどうしよう、という不安が心のどこかにあったからだ。後に聞いたことだが妹のクラスでも好評だったという。あっという間におかわりがなくなったらしい。翌年、その内の一品、甘辛鶏ごぼうが学校主催の試食会にでた。そこでは、保護者が給食を味わうことができる。妹に進められ、母は参加した。ごぼうと鶏肉をあげることで旨味が増して、衝撃的に美味しかったと言っていた。試食会に採用され、食べてもらえたことに対しての喜びもあった。しかし、それ以上に野火止小学校の給食をほめられたことが嬉しかった。

給食は、六年間の学校生活で必ずあるものだった。その終わりが近づいていると思うと、すごく悲しい。旬の食材で季節を感じ、好きなメニューを心待ちにするのも小学校ではもう、一年もない。私は、「料理」というものを人生で関わりのあるものにしていきたい。そう思えたのは給食のおかげといっていい。残り少ない小学校生活を大切に過ごしたい。温かくて美味しい給食の思い出を増やすためにも。